

神を美しく賛美しましょう

「感謝の祭儀の間に歌われている聖歌を覚えるために、練習する必要があるのではないかと。一信者のかたからその指摘があって、典礼部会はそのことについて検討した結果、5月13日10時のミサ後から15時まで、聖歌の練習を行うことになりました。子どもから大人まで大勢の方が参加するようにご案内致します。



*ところがそもそも、どうして感謝の祭儀の間に私たちは聖歌を歌うのでしょうか。

民謡の豊かな国でカラオケが盛んになった時代に「どうして人が歌うのか」と先に考えれば、ただ今の問いかけに答えることができるでしょう。

—ただし聖歌には大きな特徴があります。自分のために、観客のために歌うのでは

ありません。上手下手関係なしに、共に神へ心を向け、共に歌います。共に神のあわれみを祈り求め、神を賛美し、神に感謝の心を表し、一致して神への信仰を告白します。

—聖歌は「式」の飾り物ではありません。あってもなくても同じことだということでもありません。聖アウグスティヌス(354年～430年)が書いたように、神に向かって「歌うことは、祈ることを二倍にする」と。そのために誕生して以来、教会は歌うことを大切にしてきました。



*今年、私たちは第2バチカン公会議の50周年を迎えます。典礼の面において刷新を行うことによって、公会議は典礼に大きな変化をもたらしました。

—たとえば感謝の祭儀において。大ざっぱに言えば、どちらかと言うと、公会議以前に信者たちは「ミサに出席するように」要求されていましたが、公会議は、参加するように強く呼びかけています。以前は、

出席していた信者は背中を向けて話していた司祭の言葉、後からラテン語で歌っていた聖歌隊の歌を聞くようにしていましたが、公会議以後会衆に向かう司祭の呼びかけに信者が答え、共に、あるいは交互に、歌うことによって参加する信者が、イエス・キリストを中心とした一致に生きることを呼びかけられています。

積極的な参加が求められるだけに、聖歌を歌うことの大切さが一段と強調されました。—それゆえ、聖歌を丁寧に歌うために努力を軽視してはならないということです。華麗な演奏を目指すためではなく、参加しているすべての人々の祈る心が高められ、支えられるためです。

*しかしそうなるためには通常、心構えができているでしょうか。

●聖歌を丁寧に歌うために練習は欠かせないものですが、そのために時間をいつ設ければいいのでしょうか。—主日のミサの前か。しかしその練習時間に何人間に合うのでしょうか。主日のミサの後か。しかし何人残るのでしょうか。現実には厳しいものです。

一つの試みとして主日を利用し、少し時間をかけて先ほど案内しましたように5月13日に練習を行います。

●ついでに、丁寧に聖歌を歌うために一人ひとりに求められる小さな努力があります。ミサが始まる前に、その日に歌われる曲に目を通すこと、歌う前に早めに聖

歌集を開くことです。

—自分には歌う自信がなく、曲を知らないにしても、参加する意思を表わすことは大切なことだと思います。聖歌集を手にすることはその一つのしるしではないでしょうか。



*どうか皆さん、聖歌を歌うことによって感謝の祭儀に積極的に参加し、同じ信仰の内に共に神を美しく賛美するために一層心と声を合わせるように励んでみましょう。

—5月13日できるかぎり都合をつけるようにご協力をお願いいたします。—